

# NTTグループ40年史 特別インタビュー

NTT 株式会社 取締役会長

澤田 純



NTTが1985年に民営化されて以来、通信業界は予測不可能な激変に見舞われました。通信技術は従来のインフラの枠を超えて経済安全保障にも直結し、その役割を大きく拡大しています。この激動の40年を振り返り、NTTが果たすべき不変の使命と、その現代的な意義について澤田純会長に伺いました。

## — NTTが誕生してから、節目となる40年を迎えました。

40年を振り返るには、NTTの前身である日本電信電話公社（電電公社）の成り立ちが欠かせません。電電公社は戦後の荒廃した国土で、全国に電話インフラを整備することを目的に設立された国営の公共企業体です。単なるインフラ整備だけでなく、海外製技術に頼らず自主開発をすることも重要なミッションでした。

しかし、1977年には全国で電話の設置が完了し、当初のミッションは達成されました。これが1985年の民営化へと向かう転機となります。参入競争により、通信はさらなる広がりを見せると考えられたからです。

ただ、当時は競争というものを知りませんから、若手社員を中心とした「民営化賛成派」と「反対派」に分かれました。まだパソコンやインターネットもなく、ファックスが最も高機能といわれる時代でしたが、我々には「電話インフラにおいて結果を出してきた」という自負がありました。この頃は、将来への期待感で満ち溢れていました。

民営化後はインフラ整備からサービス提供へと大きく舵を切りましたが、本質的な役割は今も昔も変わらず、「その時代の社会基盤をつくること」です。この40年は絶え間ない変革の歴史でしたが、大きく3つのフェーズに分けられると思います。